

Tan Chee-Beng

***Chinese Minority in a Malay State:
The Case of Trengganu in Malaysia,***

Eastern University Press, Singapore, 2002.

来年 2004 年はマレーシアで総選挙が予定されている。その主要な焦点は、マレー人票の行方であろう。前回 1999 年の総選挙では野党連合が票を伸ばし、40 年ぶりにトレンガヌ州に PAS 州政府が誕生した。こうした政治変化が華人コミュニティにいかなる変化を及ぼしたか、興味をもつ人も多いただろう。だが我々はそもそも、その前と後を比較できるほどトレンガヌの華人社会について何かを知っていたであろうか。

本書は、マラッカやクランタンにおける華人の文化変容の研究で知られるタン・チーベン氏が 1987 年以来トレンガヌで行ってきたフィールド調査の成果をまとめたものである。本書の主眼は、文化の現地化の度合いが高いと思われる「プラナカン・タイプ」の華人についての考察だが、トレンガヌにおける華人コミュニティの起源から PAS 州政権下での華人コミュニティの現状までも包括し、非常に情報量が多い。冒頭のような問いを持つ人にはお薦めの 1 冊である。

本書は 3 部から成る。第 1 部では華人の移住の歴史を扱っている。その歴史は、18 世紀にトレンガヌ川沿いに河口から程遠くない場所に位置する Pulau Babi (現在は Pulau Bahagia) に由来し、ここから Wakaf Tapai および Tirok を含めて州内各地への移住が生じた。今日、この 3 地

域がプラナカン・タイプの華人の主な居住地となっている。第 2 部は Tirok におけるプラナカン・タイプの華人の言語や衣食住文化、経済状況、教育、家族関係、宗教などに関する調査結果を報告する。

第 3 部ではマレー人が圧倒的多数を占める州内の状況に華人がいかに対応しているかを論じている。華人とマレー人の関係は一般には良好だが、それはマレー人との間の誤解や問題を極力回避しようとする華人の意識の上に維持されているとする。現地のマレー語を流暢に操る彼らの言語能力は、それに大きく寄与するものだという。また、UMNO と PAS がマレー人の支持獲得を至上とする中で、マレー人の利益と矛盾する華人の要求がいかに通りにくいかが、80 年代に華人墓地に現れたマレー人スクォーターの撤去問題を通じて描かれている。80 年代以降、PAS の伸張とともに州内では全体的にイスラムのイデオロギーが強調され始め、華人はマレー人が以前ほど寛容でなくなったと感じ始めている。だが PAS 政権そのものに関しては、UMNO ほど高慢でなくエスニック偏重的でないとし、一定の評価を与えているという。

タン氏は、プラナカン・タイプの華人は様々な文化変容を遂げているものの、それはアイデンテ

ィティの変化と同義ではなく、彼らが一貫して自らを華人として認識してきたことを強調する。タン氏はまた、トレンガヌにおけるプラナカン・タイプの華人文化の消滅を予想する。マレー人の間で「より正しいマレー人」像を巡ってイスラム／マレー文化が強調される中、華人もその図式を共有

しつつあり、そのような中でプラナカン・タイプの華人は自らのマレー的な要素を意識し、それに対して消極的になりつつあるという。われわれはここに、人の意識が文化の境界線を再定義していく事例を見る事が出来るだろう。

(篠崎香織 / 東京大学大学院)

弘末雅士著

『東南アジアの建国神話』

山川出版社、2003年

本書は、インドネシア宗教社会史を専門とする著者が、一般向けに執筆した概説書であり、東南アジアに伝わる建国神話を通じ、自然と人間との関係を歴史的に考察している。

本書は以下の構成をとっている。

0. 自然・国家・人類

1. 港市国家の建国神話

2. 港市と世界秩序

3. 地域世界の形成

4. 近代における自然・国家・人類

著者はまず、今日起こっている世界の一元化と多様化という現象は、近現代に限られたものではない、としている。人間は多様な社会を形成しており、相互に交流するために古くから共通の原理を必要とし、他方で共通原理の受容に際して、その社会独自の存在理由を必要としていた。このような場面において必要とされるのが神話であり、神話は必ずしも歴史的事実から構成されてい

るわけではないが、人びとの営みの「真実」を反映している。

熱帯気候の下で豊かな降雨により形成された森林にかこまれた東南アジアの建国神話の多くは、人間と動植物との関係を丹念に説いている。また、東西海洋交通の要衝として、東南アジアにとって、海や河川は、漁業や農業に欠かせぬものであるとともに、交通路としても重要であり、建国神話にしばしば登場する。著者はまず『パサイ王国物語』(パサイ王国)、『ムラユ王統記』(マラッカ王国)、『アユタヤ王朝年代記』(アユタヤ王国)を例に、各年代記上に現れる建国神話と自然、外的世界との関係について検討している。

神話の検討を通じて、東南アジアには多様な地域からの出身者が集う港市と、地元の原理で構築された王国の世界という二つの世界が形成されていたことが指摘できる。港市は、東西世界からの外来商人をはじめ、他港市や地元出身者

を幅広く抱えていた。港市内における各集団の隔たりは固定的なものではなく、市場での商業活動を通じて、他地域との交流や通婚もしばしばなされた。その中で、港市支配者は統合のために世界秩序を模索した。海域世界におけるイスラームと大陸部における仏教の隆盛はこの典型である。

他方、交易活動の活発化は、港市と後背地の関係の強化をもたらし、内陸産品の集荷体制を確固たるものとした。農業空間が港市周辺に発展しにくかった島嶼部では、後輩地に農耕を掌る権威が台頭した。彼らは自身の権威中枢を中心に自らを神意にかなった「土着民」として位置付け、港市支配者との血縁関係を主張することなどを通じて、その存在を正統化していった。

この港市・後背地関係の崩壊をもたらしたのが欧米による植民地化である。植民地化は東南アジア海域に参入した欧米勢力が、港市を拠点に内陸部に支配を拡大したものである。これに対し、従来の港市・後背地関係の復活を唱えた運動も各地で生じたが、全て失敗に終わった。植民地体制下で後背地は輸出用一次産品の生産地として位置付けられ、食糧も必要に応じて輸入されるようになると、後背地の持つ水や豊穡への権威も失われた。一方、港市にはヨーロッパ人や中国系などの「東洋外国人」、混血者、地元出身者などが居住していた。植民地政庁はこれらの人びとを人種的観点から分類し、しばしば法的に差異を設けた。こうした中で混血者や「外来東洋人」「原住民」のなかから、ヨーロッパ人との法的地位

の平等を求める運動が生じた。彼らは植民地支配者の言語と地元の人々の言語をつなぐ二重言語者であり、ヨーロッパの啓蒙思想や社会主義、民族主義を理解し、かつそれらを地元の言語に置き換えることができた。彼らの運動のなかから生じたのが「インドネシア民族」などの「民族」概念と、ナショナリズムである。彼らは、国際的な正当性を獲得していくと同時に、その民族主義を彼らの考える「自然」と関連付けることで、それを永遠化しようとした。その意味で国民国家は、国際社会と自然とに媒介されて正統性を獲得していったといえる。

以上のことから著者は、たとえ語り手や媒介が異なるにせよ、個別的な地域秩序と普遍性を掲げた世界秩序は別個に形成されるものではなく、しばしば同じ存在として構築されたものであり、前近代の港市支配者そして近代植民地体制下の二重言語者は、双方の秩序形成に重要な役割を果たしたと、まとめている。

従来の東南アジア史研究において、前近代史と近現代史は別個に扱われる傾向にある。その中で、「神話」というテーマを通じ、前近代と近代とを結びつける本書から学ぶべき点は大きい。
(東條哲郎 / 東京大学人文社会系研究科博士課程)